

【習作】私のクラスメイトが常識に喧嘩を売っている件【一発ネタ】

素人創作者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

非常勤講師のグレン＝レーダスが赴任してからしばらくしたとある日。魔術学院に侵入したテロリストに凶刃を向けられたシステイーナは、そこで不条理な光景を目撃する。

# 目次

【習作】私のクラスメイトが常識に喧嘩を 売っている件【二発ネタ】	1
-------------------------------------	---



# 【習作】私のクラスメイトが常識に喧嘩を売っている件 【一発ネタ】

「ズドン」

その一言でテロリストを名乗る男の指先から雷撃が私へと放たれ——横合いからの紫電に撃ち落された。

「なっ!? バカnギヤアア!!!」

間髪入れずに男の方にも五月雨のごとく紫電が降り注ぎ蹂躪していく。所詮は魔術学生、軍用魔術による威嚇があれば大人しくなると侮っていたのだろう。仲間に対する思わぬ反撃にもう一人のテロリスト——ダークコートの男が動揺を抑えて魔術を唱えようとするが、多重起動された「サイ・テレキネシス」により動きを封じられ、その間にカツシユを筆頭とした格闘が得意な男子たちに取り押さえられた。

「ふっざけんなア! テメエらただの学生がなんでこんな動けアババババ!」

先に倒されたチンピラ風の男が何やら騒ぎ立てるが、「フアンタズマル・フォース」をかけられ直ぐに幻術に沈んだ。流石は頭のおかしい学生を集めたと評判のクラス。学生レベルに留まらない魔術行使で帝国を永らく蝕むテロ組織の一員を平然と制圧する

様は、見ていて呆れるほど鮮やかだった。

「おのれ、何故ただの魔術学生が対応できる……!」

取り押さえられたダークコートの男が疑問を口にするが、それに答えるものなどいるはずもなく。

「おーいギイブル! こいつ、なんか良い剣持ってるぞー!」

「すぐさま渡せカツシュ。僕の魔術芸術の材料にする」

「んな! やめろ貴様ら! その剣の記憶がどれほど貴重なものか分かっているのか!」

「そんなことは僕らには関係ないね」「そんなの俺らにや関係ないな」

傍から見れば正反対な二人が息ピッタリに相手の主張を切り捨てながら、奪い取った剣を錬金術で前衛芸術に変えていくのを見て、

「ああ、グレン先生早く来ないかな……」

私はクラスメイト達にあっさり捕縛された憐れなテロリストから視線を外し、まだ来ぬ愛しの人に思いをはせるのであった。



「つてことがあったんですけど、このクラス常識に喧嘩売っている人多くありませんか

「？」

『少なくともそれは【ゲイルブロウ】で音声を任意の座標に送って遠隔通信しているお前が言っていることじゃないよな、白猫』

「まったく先生ったら、褒めても何も出ませんよ?」

「あ、あははは……」

赤面して周囲に風を巻き起こしているシステイを見て、思わず乾いた笑いがこぼれる。

……………お城にいる女王陛下へ。

私のクラスメイトは今日も元気に、常識に喧嘩を売っています。